

学校教育目標

夢・命・絆

夢 に向かっていく生徒
命 を大切にする生徒
絆 を互いに深め合う生徒



須和田が丘

令和4年度
学校だより No. 39
令和5年3月16日

市川市立第二中学校
校長 石田 清彦

ホームページ <http://www.dai2-tyu.ichikawa-school.ed.jp/>

マスクの着脱について

マスクの着用については、個人の主体的な選択を尊重し、3月13日より個人の判断が基本となりました。

但し、感染拡大防止対策として、マスクの着用が効果的である場面などについては、マスクの着用を推奨することとしており、受診時や医療機関・高齢者施設などを訪問するとき、通勤ラッシュ時など混雑した電車・バスに乗車するときなどを、具体例として挙げています。

過日開催された県の新型コロナウイルス感染症対策本部では「学校など重症化リスクの低い方が多い施設では、換気などの基本的な感染対策により感染リスクを低減できるのであれば、マスクの着用は個人の判断とすることを基本として、感染対策を実施」することとしており、学校においては4月1日より同対応を実施するよう通知がありました。

このことから、今年度末まではこれまでの対応に変更はありませんが、来年度からは、マスクの着用は、屋内・屋外を問わず、個人の判断に委ねることとなります。

保護者の皆様におかれましては、ご理解くださいますようお願いいたします。

卒業式答辞について

3月10日に第74回卒業証書授与式が無事に終わりました。

卒業生の学年は、臨時休校によって入学式を行えませんでした、「それでも前を向く」卒業生一人一人の姿に私たちは勇気づけられ、第二中学校の明るく新しい未来を感じることができました。

卒業生の3年間の思いは卒業式の「答辞」に全てが表現されていたと思います。

在校生の皆さんは出席ができませんでしたので、以下に「答辞」を紹介いたします。

第74回卒業証書授与式 答辞 卒業生代表

雨のち晴れ。振り返ると私たちの過ごした三年間は、まさに雨のち晴れそのものだったように感じます。そんな中学校生活の集大成である今日、まるで私たちの門出を祝っているかのような美しい晴れ空の下で卒業式を迎えられたこと、心から嬉しく思います。本日はこのような素敵な式を催して下さい、誠にありがとうございます。

三年前、新入生である私たちを迎えたのは四月の桜ではなく、六月の空から降り注ぐ冷たい雨でした。それから数週間にもわたって続いた分散登校、慣れないマスク、最小の規模で行われた入学式の代わりとなる入学を祝う会。クラスメイトとの交流も満足に出来ないまま、大切な時間が雨に塗りつぶされていくのを感じました。

部活動への参加も大幅に遅れ、楽しみにしていた体育祭は中止に。

「こんなはずじゃなかった」期待よりも不安が大きかった日々の中で、何度そう思ったか分かりません。しかし、そんなどんよりした雲の隙間から、そっと光が差すような瞬間もありました。感染対策を十分に行ったうえで実施が可能となった校外学習では、班ごとのカレー作りなどを通して、仲間と同じ時を過ごすことの楽しさや、協力することの大切さを知ることが出来ました。

二年生になると、クラスが替わり、一年生を支える役目も担うようになりました。私たちにとっても初めての開催となった体育祭は、開会式の直前まで大雨が降っていましたが、奇跡的に止み、仲間と共に全力で楽しむことができました。これもまた「雨のち晴れ」と言える経験だったのではないかと思います。

またこの年は、私たちの主体性が大きく育った年でもありました。みんなの輝ける場をつくろうという思いの下、生徒を中心に企画・運営された学年祭が、そのうちの一つです。仲間たちの思わぬ特技や個性を知ることが出来たこのイベントは、それぞれが自分のやりたいこと、興味のあることについて

で考えるきっかけにもなりました。

そのほかにも、クラスでの絆の深まりや、今後に向けての希望を感じられる場面が多かったように思います。黒い雲が徐々に流れ、暖かい太陽が顔をのぞかせたような、そんな一年でした。

三年生になり、あらゆる行事が中学校生活最後のものとなった中、その全てが美しい思い出として記憶に残っています。

前日の雷雨と雷が嘘のように雲ひとつない晴天の下で行われた体育祭。私たち三年生は、より熱い応援のために自ら全校生徒数分のポンポンを作ったり、競技の前に円陣を組んだりして、最高学年として行事を盛り上げることが出来ました。真っ青な空から私たちを照らす太陽を見て、自分たちは今やっと青春を味わうことが出来ているのだと、心からそう感じました。

各地の学校で中止が相次いでいる中、京都・奈良への修学旅行にも行くことができました。初めて目にする建物に、初めて触れる伝統文化。班のメンバーと協力しながら行動したからか、その全てがより鮮やかに感じられました。大切な仲間たちと笑いあい、共に過ごしたこの三日間の思い出は、今でも私の宝物です。

私たちがこの場所で過ごした三年間。それは、常に揺れ動く世の中で、不安を感じることの多い三年間だったかもしれません。ですが、その分得られたものも多い三年間であったと、私は強く思います。同じ痛みを抱えた私たちだったからこそ分かち合えた青春が、そこには確かにあったのです。

雨上がりの空が美しく晴れるように、決して理想的とは言えない形で始まった私たちの中学校生活は今、あたたかな希望の光とともに、その幕を下ろそうとしています。これから、別々の道を歩んでいく仲間たちへ。どんな時でもそばにいてくれたことへの感謝と、互いの未来がより光あふれるものであるようにという願いを込めて、この歌を歌います。・・・「桜散る頃」・・・

二中の未来を担う、在校生の皆さんへ。昨年行われた二中フェスティバルでは、実行委員として積極的に行動したり、中心となって行事を盛り上げたりしてくれた二年生の姿が印象に残っています。そんな皆さんならきっと、どんな大雨の日も、たとえ竜巻の日であっても、力を合わせて乗り越えてゆけることでしょう。どうか、いかなる時でも希望を捨てずに、生徒を主役とした活動を続けていって下さい。

そして、いつも誰より近くで私たちを見守り、寄り添って支えてくれた大切な家族たち。その支えのおかげで、私たちはこうして、無事に中学校卒業の日を迎えることができました。皆を代表して、心より感謝します。本当にありがとうございます。

雨のち晴れ。私たちの未来もきっと、この言葉通りに、陰りと輝きを何度も繰り返していくでしょう。その途中で、真っ黒な雲に飲み込まれそうになることだってあるかもしれません。ですが、私たちならどんな時でも諦めず、時には雨宿りもしながら、いかなる苦難にも打ち勝っていけると信じています。

入学から卒業まで、本当にあっという間でした。今この場で卒業生代表として話をしている私自身、実はあまり卒業の実感が湧いていません。これから大人になるにつれて、部活動や仕事などの独自のまとまりが、自然と生活の中心になっていくでしょう。クラスや学年のような、目標や考え方がばらばらであり、統一性のない数十名、数百名が集まった集団を「仲間」だと呼べるのは、きっとこの中学校が最後だと思います。

このことに気づいた時、私は自分がすごくもったいないことをしたような気分になりました。もっと早く、この時間の特別さに気づけばよかったと、強く思いました。

でもきっと、それでいいのです。あまりにも当たり前で、まるで永遠のように思えた日常。その最中には気づかなかつたようなささいな幸せや失敗こそが、現在の私たちをつくってくれているのだと、卒業を迎えた今ではそう思えます。

思えばあまりに濃密だった三年間も、今日で終わりです。これから、ここにいる全員が当たり前の日常を全力で生き、自分なりの道を笑顔で歩いて行けることを心から願い、答辞とさせていただきます。